

You only live once

内田芳邦

日本語
BILINGUAL
英語



夕樹は買い物用の袋をハンドバッグに入れマンションを出た。日は西に傾いたが、頭上の空はまだうっすら青く街路樹の葉は日の光を浴びて金色に輝いている。

土曜日の夕方である。いきつけのスーパーは買い物客であふれ、店員の威勢のいい呼び込みで活気づいている。夕樹はエメリーナのことを思い出してくすりと笑った。エメリーナは夕樹が通う英会話教室の女性講師だ。

“Has anything in Japan surprised you?”

“Well. . . . The first surprise I got was when I went to a supermarket. Everything was noisy. They were playing CDs and shouting something.”

「なにか、日本で驚いたことある？」

エメリーナは少し考えてから言った。

「そうね. . . . 私が最初に驚いたのはスーパーへ行ったときのことかな。なにもかも騒がしかったの。店員たちは、ずっとCDをかけていたし、なにか叫んでいたわ」

期待した返答とあまりに異なったので、夕樹は拍子抜けした。もう少しレベルの高いというか、日本文化の特徴みたいなことが話題になるのかと思っていたのだ。

(きょうの夕飯は何にしようか)

カートを押しながら、あれこれ覗いていると携帯の着信が鳴った。麻衣からだ。

「もしもし.」

「ユキ. . . わたし。きょう、なにか予定ある？」

「なにもないけど」

「今からユキのところへ行っていい？」

受話器のむこうの麻衣の声は涙ぐんでいた。夕樹は、なるべくやさしく聞こえるように言った。

「じゃあ、夕飯を一緒に食べようか、なにかつくるから」

9月に入って3度目の土曜日だ。日中の暑さにはまだまだうんざりするが、朝夕の涼風には秋の気配を感じる。夕樹がひとり暮らしを始めて3年になる。

「結婚するまでは一緒に住めばいいじゃないの」

と、両親はひきとめたが夕樹はきかなかった。親と一緒に生活はラクで安あがりだが、快適すぎるのも不安なのだ。夕樹は今年28歳になる。

夕樹の住まいは4階建てマンションの3階の部屋。南向きの7畳の洋間とその北側の1室にキッチンとトイレと浴室があって、その先が玄関になっている。洋間とキッチンのあいだには仕切りがないからワンルームということになる。

築10年の建物だが、外壁を塗り直したばかりで古くは見えない。ほんとうは、駅周辺の新しいマンションがいいのだが、安月給の身では贅沢は言えない。駅から離れているとはいえ、歩いて5分の大通を走る路面電車に乗ればJR豊橋駅まで20分だ。賃料からすればぜんぜん悪くない。

夕樹は冷蔵庫にあったトマト、キュウリ、パプリカとレタスでサラダをつくり、買ってきたバゲットとカマンベールチーズをカットし皿に盛った。それからフライパンにサラ

ダ油をしき、ガステーブルのつまみを中火の弱にしぼって、塩をふっておいた鶏肉をのせた。皮側を下にして弱めの中火でじっくり時間をかけて焼くのがコツだとテレビ番組でやっていた。

(麻衣はこの先どうするんだろう)

電話の様子だと、今回はちょっと深刻そうだ。麻衣は夕樹の高校時代からの気の合う親友だ。会社の上司との不倫にはまってもう4年になる。高校時代の成績は良かったし頭は悪くないはずなのに、なんの見通しもない不倫からなかなか抜け出せない。

夕樹は熱で厚みの中ほどまで白くなってきた肉を裏返した。皮はきつね色にパリッとほどよく焼きあがっている。ひっくり返した肉は、下から徐々に焼けて全体が白っぽくなった。火を止め、仕上げに黒こしょうをふって取り出した。それから、フライパンにバターとニンニクを入れて熱し、ほうれん草を加えた。

(迷ってるんだ麻衣は)

と思った。そして、夕樹も迷っていた。夕樹が仕事をやめ東京へ出て浩人と暮らせば結婚することになるのだろうが。

夕樹は、高校卒業後、地元の小さな商社に勤めて9年になる。事務の仕事は退屈だが、そつなくこなしている。二十歳の頃には、もっとやりがいのある仕事に就きたいと悩んだこともあったが、しだいに、仕事は仕事、給料を得るためのもので、やりたいことは趣味でやればいいと考えるようになった。今では、この不景気の中、正社員で働けるだけでもありがたいと感謝している。大学を出たって正社員就職が難しい時代なのだ。

夕樹の恋愛は遠距離だ。恋人の浩人は高校の同級生で3年生のときクラスが同じだった。浩人は東京の大学に進学したが、高校を卒業して2年目の夏、地元で開かれたクラス会で夕樹と再会した。その数日後、夕樹は浩人からメールを受け取った。それから、大学の休みのたびに、浩人が故郷の豊橋に帰ってきて夕樹とデートした。夏休みと冬休みだけでなく、春も秋もデートした。大学というところは、どうしてこんなに休みが多いのだろう、と夕樹は大学生がうらやましかった。

つきあいが深くなるにつれ、夕樹も浩人も結婚を意識した。しかし、そこから先へなかなか進まないのだ。

浩人は大学卒業後、中堅の物流会社の東京本社に就職した。週末はお互い休日だから、新幹線を使って、浩人が豊橋に帰ってきたり夕樹が東京に出たりして会っていたが、若いふたりのサラリーでは、新幹線で毎週デートというわけにもいかなかった。

3年前、部署が変わってから浩人の仕事は忙しくなって、週末も自由にならないことが増えてきた。デートの回数も徐々に減ってきて、1カ月前のお盆休みに豊橋で会ったのが最後である。

ふたりが結婚するためには、夕樹が思いきって仕事をやめ東京に出て行けばいいのだろうが、その一歩がなかなか踏みだせない。2週間前、電話で言い争ってからは、お互い意固地になって電話もメールもしていない。

「とりあえず、こちらへ来ないか」

「・・・・・・・・」

「心配ばかりしていてもしかたがないよ。まず、一緒に暮らすことから始めればいいのかと思うな。このままでは、つづかないよ」

と、彼は言い、夕樹は「うん」と返事しなかった。

夕樹は不安だった。結婚して、見も知らぬ東京で、ふたりの生活はどんなものになるのだろうか。浩人とのデートで夕樹は何度も東京に行ったが、あの大都会にはどうしてもなじめない。かつての活気を失いつつある地方都市であっても、夕樹は生まれ育った豊橋が好きだ。ここの空気につつまれていれば安心できる。この土地で結婚し、ここで子育てしたらどんなにかいいだろうと思う。ここには両親も友人もいる。

東京で、夕樹に仕事は見つかるのだろうか。バブルがはじけて20年過ぎても、日本中が不景気から抜け出せない。東京という大都会で、浩人の給料だけで妻子を養っていけるのだろうか？「まず一緒に暮らせば」と言う浩人だって不安なのだと夕樹は感じた。

玄関の呼び出しチャイムが鳴った。

ドアを開けると、ベージュのワンピースにブラウンのケープをはおった麻衣が疲れたような顔をして立っていた。手にした紙袋を少し上げて夕樹に見せると悲しそうな笑顔をつくった。

「ワイン、買ってきちゃった」

夕樹と麻衣は、「じゃあ」と言って赤ワインを注いだグラスをなんとなく合わせた。こんな状況で乾杯は変だけれど、始まりの合図がないのも困る。麻衣はお酒に強い方だが、それにしても、きょうはピッチがはやい。

「バカにしてるよね」

麻衣は涙ぐむかと思えば怒って彼氏の悪口を言った。夕樹は黙ってハナシを聞き、ときどき麻衣の怒りに相づちを打つ。

「ラブホテルから出てきて食事かなと思ったら『すまない。きょうの夕飯は家族と一緒にできないとまずいから』だって。なんなのよ私は」

「それはないよね」

ホテルを出て、ひとり取り残された麻衣は惨めな気持ちに打ちのめされて夕樹に電話したのだという。

「離婚したら結婚するって……何年になると思う？離婚する気なんてはじめからなかったのよ。バカみたい、私って」

麻衣はさすがに嫌気がさしたようだ。それで、夕樹はワインを少し飲んでから静かに言った。

「ねえ麻衣、もうやめにすれば」

「えっ」

「だって、麻衣、私たちってもうすぐ28だよ。あと2年で20代は終わりじゃない。このままつづけて、大切な時間をどんどん無駄にする気なの？」

麻衣は黙って手にしたグラスを見つめている。アルコールも手伝って夕樹の気分は昂揚してきた。

「離婚して麻衣と結婚するなんてウソよ。麻衣は、ほんとうにあんな男と結婚したいの？ろくでもない男じゃないの」

今までにない夕樹の剣幕に麻衣は驚いて顔を上げた。

「ろくでもないって、それはちょっとひどいよ。ユキにはわからないだろうけど、いいところもあるのよ。彼、真剣に考えてくれたみたい」

「真剣に考えて、なによ。結局、離婚も結婚もしてないじゃん」

「それはそうだけど」

「それに……相手の奥さんや子どもが可哀想よ」

麻衣は悲しそうに窓の外に目をやった。夕樹はあわててつけ加えた。

「ごめん。……ちょっと言いすぎた」

麻衣はしんみりと言った。

「そうだよ。奥さんや子どもがいるんだよね。でもなぜだろう。私、うしろめたい気持

ちは全然ないのよね」

夕樹は何と言えればいいのか言葉が浮かばない。しばらく無言がつづいたあと、麻衣は話題を夕樹にふった。

「ユキの方はどうなの？ヒロトとはうまくいってるの？」

「うーん・・・2週間前、電話でケンカしたきりなの。ヒロトは私に東京へ来いと言うけれどね」

翌朝、目を覚ますと部屋の中はもうすっかり明るかった。夕樹は、一瞬、間をおいて、昨夜のことを思い出した。夕樹にしては少し飲み過ぎたようだ。ベッドの横のフロアには麻衣の寝ていた布団がたたんである。麻衣が布団をかたづけている物音は聞いたが、それからまた眠ってしまったようだ。壁に掛けた時計に目をやると8時をまわっている。夕樹はアルコールに弱い。少しでも飲み過ぎると翌朝はなかなか起きられない。たたんだ布団の上にメモがある。ベッドから降りてメモを手にとった。

「ごめんね、ユキ。昨夜は、私のハナシを聞いてくれてありがとう。また埋め合わせするからね。きょうは朝から予定があるので帰ります」

夕樹はキッチンへ行き、冷蔵庫から天然水のペットボトルをとり出しコップに注ぐと一気に飲んだ。それから、窓辺に歩み寄りカーテンをひらいて窓をあけた。街路樹の葉が風にそよぎ、薄雲をとおって9月の日ざしが通りにひろがっている。夕樹は腕を広げて大きく伸びをした。

夕樹は疲れていた。それでも気をとりなおして浴室に入り、湯を熱めにしてシャワーを浴びた。身体を洗い髪を洗って疲れも一緒に洗い流してしまいたかった。

浴室から出ると身体を拭いて、いつものスエットを身につけた。髪をブローしながら鏡に映る自分を見つめる。肌の張りが少し衰えたような気がする。そんな気分を振りはらうように、両手で頬をパンパンと叩いてからローションをのぼすと目尻のあたりを念入りにマッサージした。

(マイナス思考はやめよう。せっかくの日曜日だ)

そう自分に言い聞かせると、CDミニコンポの電源を入れてディスクトレイを引きだしモーツァルトの『弦楽四重奏』をのせた。

今までこういう音楽は聴いたことがなかったが、いいなあと思う。それぞれの楽器が、たがいに気を配り呼吸を合わせ、繊細に抑制されて、澄みきった空間をバイオリンの優美な旋律がのびやかに流れていく。

ポットに水を入れ火にかけた。オーブントースターに薄切り食パン一枚入れたが、考え直してもう一枚入れる。

お湯が沸いて、ステンレス製のドリップポットに紅茶の茶葉を入れ、お湯をたっぷり注いだ。3日前、陶器のポットを落として割ってしまったので今度はステンレス製のものにした。それから、パンを取りだして一枚にはマーマレード、もう一枚にはバターを塗った。紅茶は香りの高いアールグレイだから砂糖もレモンも入れない。

夕樹は窓辺のテーブルの椅子に腰掛け、紅茶をすすりトーストをかじって通りを見下ろした。つややかな黒毛のダックスフンドが小さな声で吠えながらジグザグに走ってきた。リードを手にした女の子が犬に引かれてつづく。そのあとを弟だろうか、幼い男の子がなにやらわめいて追いかけていく。

夕樹は小学校にあがった頃を思い出した。4つ年上の姉について家の近くの公園で遊んだ。あの公園は今でもある。さほど広くないのに、子どもの頃の記憶の中ではうんと広くて、真ん中を横切って走ると息切れがして途中で倒れそうになったことがある。

学校から帰ると、おやつ代わりに食パンを一枚手にし姉の後を追いかけた。姉は快活

な性格で成績も良く、学校でも近所でも、いつも子どもたちの中心になっていた。夕暮れ時になると、子どもたちは時間に追われるかのように大声をあげて走りまわっていたものだ。

夕樹はカップに残った紅茶を飲みほした。小学生の頃はイヤなこともあったけれど楽しいことの方が多かった。しかし、中学、高校へと進むにつれ、勉強でも恋愛でも思うようにいかないことが増えていった。

夕樹は英会話レッスンでの誕生パーティの話を思いだした。

“The number of candles represents the new age of the child. When the cake is placed before the child, the child makes a wish, and without telling anyone what it is, blows out the candles. If all the candles are blown out with one breath, it is believed that the wish will come true.”

「キャンドルの数は、その子の新しい年齢を示している。ケーキが目の前に置かれると、願いごとをひとつして、その願いが何であるかは誰にも話さずキャンドルの火を吹き消す。もし、ひと息ですべてのキャンドルの火が消えれば、願いごとが叶うと信じられている」

(そうなんだ・・・)

と、夕樹は男性講師ベンの薄くなった頭をぼんやり眺めた。年とともにキャンドルの数は増え、ひと息で火を吹き消すのは難しくなる。ひとは誰でも歳をとり、それとともに夢は実現しにくくなっていくのだ。

(子どもか・・・)

と、ぼんやり考え、立ち上がってキッチンへ行き紅茶のおかわりをした。夕樹の友人には子育て奮闘中のママが多い。子育てに追われる友人たちは、みな大変そうだが幸せそう。ときどき、そんな友人たちをうらやましく思う。

望の子どもは双子の男の子で1歳半になる。めちゃめちゃ大変みたいだけれど、子どものことを話すときの目はきらきらしていて、とても幸福そう。

「もう大変。昼間はおもちゃの奪いあい、夜寝るときはママの取りあい、おもちゃは二つ与えられるけどママはひとりだからね」

「ママは大変だけれど、双子って、子どもたちにとっては、おたがい刺激しあっていいんじゃないの？」

「うーん、どうだろう？でも、絵本なんか読んでやっていると、すぐに本の取りあいになって最後まで読めないのよ。おたがい足の引っ張りあい集中できないような気もするな」

「ふーん、そうなんだ」

「双子って、おたがい刺激しあい競いあってと、足の引っ張りあいとでプラスマイナスゼロかな。でも、ひとり育てるのとふたり同時に育てるのでは、エネルギーは2倍じゃないよ。3倍とまではいなくても2.5倍は必要だと思うな」

「浩人さんとはどうなってるの？」

と夕樹の母は心配する。そんなとき、「うん、そのうちね」となるべく穏やかに返事する。以前は、母からそんなふうに言われると反発ばかりが先にたって「もー、うるさいな」と不機嫌な顔で自分の部屋に閉じこもったものだが、今は、自分を気づかう母や父の気持ち理解できる。

夕樹は週1度英会話レッスンを受けている。始めてからもう6年になる。その間、英語が必要な仕事に就いたわけでもないし、日常生活で英語が必要な場面なども今までのところ全くない。お金がもったいないな、という気がすることもあるが、今やめれば、英語などすぐに話せなくなってしまうだろうなとも思う。そう考えると、それはそれでもったいないと感じて、やめられないのだ。それに、自分と同じ年代の欧米人と話すのは楽しい。日本人同士の会話からでは、思いもよらない考え方や視点に気づかされることも少なくない。

レッスンは講師1人に対し生徒は最大4人のグループレッスンだが、2年ほどしてレベルが上のクラスになると、生徒ひとり講師ひとりのマンツーマンレッスンになる場合もある。

“My mom told me I should get married by the time I am thirty.”

「30歳までに結婚したほうがいいね、と母が言うのよ」

と、夕樹が言うと、講師のベンは妙に力を入れて反論した。

“Why? Why does your mother put pressure on you to marry? Why does your mother think you have to marry by the time you are thirty? I don't see why thirty is important. Surely, any age is OK. Yeah, the proper age to get married is when you want to.”

「なぜ？なぜ、あなたのお母さんは結婚しなさいと強制するの？なぜ、あなたのお母さんは、あなたが30歳までに結婚しなければならないと思うの？なぜ30歳が重要なのか私には理解できない。何歳でもいいんだよ。そうだよ、結婚に適する年齢というのは、結婚したいと思うそのときだよ」

ベンはスコットランド出身、人の好きそうな30代後半の男性だ。うーん、any age is OK か、the proper age to get married is when you want to か。でも、男はいいよな、そんな能天気なことを言われていられるんだから。女性の場合ふつう結婚の次は妊娠そして出産という流れになる。男性は70歳でも子どもをつくれるそうだが、女性は何歳まで可能だろうか？可能であっても高齢出産はリスクをとまなう。夕樹は言った。

“Well. . . .I think the main reason is health for having a baby. It's risky for women to have a baby when they are older.”

「そうね、出産についてのことが主な理由よ。高齢出産は危険だから」

そういえば、この頃は「婚期」などという言葉も聞かなくなった。それどころか、最近、日本でも高齢の男性芸能人があいついで30歳差、40歳差で結婚し「歳の差婚の流行」などと騒がれている。若い奥さんの横でうれしそうに照れている高齢の芸能人をテレビで見ていると、男ってホントに身勝手に単純な生きものだと思う。

夕樹は朝食を終え、皿やコップをキッチンの流しに運んだ。きょうは16時5分から英会話のレッスンが予約してある。洗濯機をまわし食器を洗ったあと、掃除機をかけバスタブも洗った。ひと息ついてから、英会話のテキストに目を通してしていると携帯の着信が鳴った。

「ユキ、わたし。きのうはごめんね。きょうのお昼あいてる？」

「あいてるけど」

「ランチしない？わたしがおごるから」

麻衣は用事を済ませて、いま名古屋にいるという。JRの新快速で12時30分頃、豊橋駅にもどる。

時計を見ると11時40分をまわっている。夕樹は慌てて化粧ポーチをとりだし、アイラインを引き唇にグロスを塗った。顔のパーツがハッキリしている夕樹は、いつも歳より若く見られる。「ぜんぜん悪くないよ」と鏡の中の自分に言ってから、膝丈のタイトなデニムのパンツに脚をとおしスモーキーピンクの長袖Tシャツに腕をとおした。オフホワイトのカーディガンも用意し、英会話のテキストやノートと一緒にディバッグに入れてマンションを出た。

日ざしはまだ強いが、風に真夏の暑さはない。夕樹は肩までの髪をなびかせながら歩いて大通に出た。そこで路面電車を待つ。

マンションから豊橋駅に出るには路面電車を使う。幼い頃、夕樹はこの路面電車に乗るのが好きだった。電車で揺られて豊橋駅に出るとデパートがあって、その屋上には幼い子ども用のちょっとした乗り物が備えてあった。休みになると、夕樹と姉は両親にせがんで連れて行ってもらった。屋上の乗り物で遊んだあと、階下のレストランでお子様ランチを食べるのが楽しみだった。両親は夕樹と姉をかわいがってくれた。

大通の車道の真ん中にある電停に、青色の1両きりの箱形の路面電車がゆっくりやって来る。豊橋市の路面電車にも、数年前から丸みをおびた大きな窓ガラスの運転席やバリアフリーの低床型のドアを備えた新式モデルの白い電車が導入されたが、その運行本数はまだ少ないようだ。

1両きりの旧式電車の中はすぐに混んでしまうが、両側の長座席にはまだ数人分の余裕があった。腰をおろした夕樹はカーラのことを考えた。

カーラは、きょうのレッスンの講師でカナダのケベック市出身の女性だ。栗色のショートヘアの小顔で背は見た目より高い。小顔だけれど腰まわりは骨格も肉づきも立派というアングロ・サクソンの講師には、なにかしら圧迫感を感じてしまうけれど、彼女の場合、身体は上から下まで普通サイズで顔立ちも東洋系だから日本人のような親しみを感じる。しかも同じ20代後半の独身で、夕樹は彼女と気が合う。

彼女が日本にやってきたのは昨年2月だった。梅と桜についての彼女の話が印象的だった。

"I went to a park to see plum blossoms because somebody recommended. Actually I was disappointed because they were very sparse. I saw pictures of cherry blossoms in Japan and

it was just pink everywhere. I'd expected that plum blossoms were kind of the same. I've never seen cherry blossoms in person. I've only seen pictures. So, this spring will be my first time to see cherry blossoms in person."

「梅の花を鑑賞しに公園へ行ったの、ひとに勧められたから。でもほんとうのことを言うと、がっかりしちゃった。花がまばらだったから。(日本に来る前に)桜の花の写真を見たの。どこもかしこも全面ピンクだった。それで、梅の花もまあ同じようなものだろうと思って出かけたのよ。私は 今まで桜の花を実際に見たことがないの。だから、この春、初めて桜を見るのよ」

それから、夕樹とカーラはテキストに沿って結婚や出産の話をした。

"It's very similar to Canada. People used to marry very early but now many people marry later. Some people don't marry and just have kids. Half of people who married get divorced."

「カナダでも同じよ。昔は、みんなうんと若いうちに結婚していた。でも、今は多くの人が晩婚なのよ。なかには結婚しないで子どもを産む人もいる。そして、結婚した半数の人が離婚するの」

夕樹はカーラに訊いた。

"Do you want to have children?"

"Yes, I do eventually. Maybe in my thirties. No more than two. I like to work. So, if I have a child, my husband will have to stay home and take care of the child. My boyfriend says 'That's fine.' He will do it. He doesn't like to work. He says that his work's too hard and he wants to be a musician now. Yes, he's going to be a rock star. Ha,ha,ha."

「あなた、こどもは欲しいの(産むの)」

「ええ、ゆくゆくはね。たぶん、30代で、2人まで。私は働きたいの。だから、子どもができたら、夫には家にいて子どもの世話をしたいのよ。私の彼氏は『いいよ』と言ってくれる。彼はそのつもりみたい。仕事がイヤなんだって。とてもキツイんだって。それでね、ミュージシャンになりたいんだって。そうなのよ、ロックンローラーになるんだって、あはは」

大学時代に知りあった彼氏は、カーラの故郷ケベック市から鉄道で約3時間離れたモントリオールに住んでいて、今はスカイプやメールで連絡を取りあっているのだそうだ。

次の電停で、高校生らしい男女のグループが乗り込んできた。若者たちは混雑する車内で立ったまま談笑している。

電車はやがて国道に入る。電車の外の車道は両側それぞれ2車線で、場所によっては3車線にもなる。ここは、路面電車が国道を走る全国でも珍しい区間だそうだ。箱形の1両きりの路面電車が音を立てて国道1号線をまっすぐ西へ疾走する。

進行方向右手に、ハリストス正教会の白壁に緑の屋根の美しい尖塔が見えてくる。すると電車は市役所前で停まる。客が乗り降りし、信号が変わって発車する。今度は、市の公会堂が見える。建物の正面にかかる幅広の大階段は白い花崗岩でできている。階段をのぼった2階が正面玄関で、列柱がアーチを支え、両脇の塔には4羽の大鷲の彫刻で飾られた円形ドームがのせられている。

昭和初期の建物でロマネスク様式を基調とし、円形ドームと大階段はスペイン風、玄関

前の列柱はギリシャ神殿風だそうだ。おとなになってから見ると、公会堂はさほど大きな建物ではないが、幼い頃の夕樹は、電車から見えるこの建物の異国情緒あふれる外観にいつも驚嘆していた。

少し走って電車は交差点でまた止まる。信号が青に変わると、電車の左側3車線からクルマが一斉に走り出す。前方の反対車線からも大量のクルマが走ってくる。やがて信号が左折のシグナルに変わり、スタートした電車は交差点を直角に曲がる。車輪がきしむ、乗客はかすかに遠心力を感じる。曲がりきって体勢を立て直した電車はゴォーと静かに加速する。線路の連結部を通るたびに、ガタン、ゴトンと音を立てる。すると、幼い夕樹は幸せに胸をふくらせたものだ。

電車に揺られ、夕樹の考えはカーラにもどった。あれからしばらくして、夕樹はカーラに彼氏のことを訊いてみた。

“How is your boyfriend doing?”

“Rock bands usually don't make very much money but they love their jobs. He loves his new job. I know how he feels. You only live once.”

「彼氏はどう、元気にしている？」

「ロックバンドって、まあふつう、あまりおカネにならないのよね。でも、みなその仕事が好きなのよ。彼も新しい仕事が気に入っているみたい。彼の気持ちはわかるわ。人生は一度きりだからね」

どうやら、彼氏は仕事をやめてミュージシャンとしての活動を始めたようだ。淡々と話すカーラの口調には、なにかあきらめたような響きも感じられた。うーん、You only live once か。やっぱり遠距離恋愛ってうまくいかないのかなと夕樹は思った。もっとも、モントリオールと豊橋では「超遠距離恋愛」になってしまうけれど。

梅雨が明け暑い夏が始まった頃、カーラとふたりきりのレッスンになったことがある。

“When was the last time I saw you.”

と、カーラが夕樹に訊いた。

“I can't remember. It was a long time ago.”

“Now I have news. Listen to this. We broke up in early April or late March. I can't remember but it was around that time. And then, a couple of weeks later, I met someone else.”

“Wow! Is he Japanese? Tell me who it is, if you don't mind.”

「最後に会ったのいつだった？」

「おぼえてないけど、ずいぶん前だよ」

「ところで、知らせたいことがあるの。4月初旬か3月下旬かな、思い出せないけどその頃よ、私たち別れたの。それで、それから2、3週間ほどしてね、別な出会いがあったの」「ええー！で、その人日本人なの？だれなの？」

驚いたことに、カーラの新しい恋人は同じ英会話学校の講師ニックだった。そういえば、ずいぶん前のことだが、カーラはニックのことを楽しそうに話していたことがある。

“Last night we went drinking. Nick was drunk but he still always said Please or Thank you. ‘I'd like another beer, please.’ Ha,Ha,Ha, so funny. ‘Who wants another beer?’ ‘Yes, please.’ He was drunk but he still remember some manners.”

「昨晚、みんなで飲みに行ったの。ニックたら、酔っぱらっていたんだけど、それでも

いつもプリーズとかサンキューと言っていたの。『ビールもう1本いただけますか？』ああ、おかしい。『ビールはどなたですか？』『どうも、私です』。彼は酔っぱらっていたけれど、それでもちゃんとマナーをわきまえていたのよ」

「ああ、おかしい」とカーラは笑うけれど、なぜそんなにおかしいのか夕樹には、いまひとつ理解できなかった。ニックはどの程度酔っぱらっていたのだろうか？彼は北アイルランドの出身で、とても純朴な青年だ。イングランドやフランス、ドイツの都会の人々からすると、アイルランド人のイメージは、熱心なカトリック教徒で素朴だろう。悪く言うと田舎者といったようなところもあるかもしれない。居酒屋で酔っぱらった素朴で純できまじめな青年ニックの振る舞いが、まわりの雰囲気からよほど浮いていたのだろう。そして、カーラはミュージシャンである別れた彼氏と正反対のニックに惹かれたのかもしれない。

夕樹はレッスンでニックと話したことがある。歳は夕樹やカーラと同じくらいか少し若いかもしれない。スポーツマンで、サッカーが得意。北アイルランド代表をめざしたことがある。

“I had tried for North Ireland national team but didn't make it. I was a little too small. Other players were very tall and very physical.”

“When did you start playing soccer?”

“Maybe when I was five years old. My father bought me a soccer ball. I love soccer. Three things are important in my life. Family, friends, and soccer. Before I came to Japan I played for local teams. Since I came to Japan, I've been eating too much and starting a little fat.”

「私は北アイルランドの代表選手をめざしたことがある。でも、うまくいかなかった。私は少しばかり身体が小さすぎた。他のプレーヤーは背がとても高く身体能力がすぐれていたんだ」

「サッカーを始めたのはいつなの？」

「5歳のときかな。父がサッカーボールを買ってくれたんだ。私はサッカーが大好きだ。私の場合、人生で3つのことが大切だ。家族、友人それとサッカーだ。日本に来る前、私は地元チームの選手だった。だけど、日本に来てからは、ついつい食べ過ぎて太り始めてしまった」

路面電車は、にぎやかな日曜日の駅前通を走り抜け「駅前」の電停にとまった。プラットフォームに降りた夕樹は、エスカレーターで駅前広場にあがりステーションビル2階に入った。

ステーションビル2階には、JRや名鉄のプラットフォームの上につくられた駅舎があり、駅の東口と西口を結ぶ自由通路にもなっている。通路の中央にはJRと名鉄の改札があり、西口寄りには新幹線の改札がある。

日曜日の正午過ぎ、多くの人々が改札を出入りし自由通路を行き交う。夕樹は腕時計に目をやった。しばらくして、改札内の人混みの中に麻衣の姿が見えた。麻衣は夕樹に気がつくと笑顔で手をあげた。昨夜と違って麻衣の表情は明るかった。

「ごめんユキ、待った？どこにする？お腹すいちゃった。いつものイタリアンにしようか？」

駅前のちょっとおしゃれなイタリアンで、サラダバーやドリンクバーもあって若者に

人気の店だ。

重い木製のドアを押すと店内は混んでいた。カップルだけでなく、日曜日のせいか家族連れも目立つ。ウェイトレスに案内されて、夕樹と麻衣は奥のテーブルについた。二人用のお得なセットメニューでパスタとピッツアを選んで注文すると、席を立ててサラダとドリンクをとりに行った。麻衣はサラダバーの品をどれもこれもとって皿いっぱいのにせて運んできた。

「どうしたの、麻衣。食欲旺盛ね」

「ユキ、きのうはありがとう」

「わたし、ちょっと言いすぎた？」

「ううん。ユキにはっきり言われてよかったよ。わたしね、もうやめようと決めたの」

「そうなんだ」

「うん。やっぱり結婚なんて無理だし、相手の奥さんや子どもにも悪いし」

「そうね……でも麻衣、落ち込まないで。わたしたちって、まだまだこれからだよ。いいじゃない、麻衣はちょっと深刻な体験をして、それからひとまわり大きくなって再出発するんだよ」

「ありがとう」

それから、麻衣と夕樹はよく食べよくしゃべった。

レストランを出ると、いつの間にか青空がひろがっていた。麻衣と別れた夕樹は図書館にむかった。小説を3冊と旅行のガイドブックを2冊借りたまま、返却予定日を3日も過ぎてている。それなのに、まだ半分も読んでない。

旅行のガイドブックはスペインと京都のものだ。いつかスペインへ行ってみたい。古都トレド、グラナダのアルハンブラ宮殿、プラド美術館、フラメンコ、パエリャ、バルセロナにバレンシア。京都へは、高校を卒業したとき友人と4人で行ったが、今度はひとりでゆっくりまわってみたい。それに、夏と冬が日本と真反対のオーストラリアへも行ってみたい。

日中、街の中を歩くと、まだまだ暑く汗ばむほどだ。中央図書館に着くと、夕樹は入り口のガラス扉を押してロビーをすすみ、右手のカウンターで本を返却した。館内の冷房が心地よい。反対側の新聞コーナーと雑誌コーナーのソファには大勢の人がかけている。夕樹は空いている席を探してすわった。歩いて少し疲れたのだ。隣には、若い父親が赤ちゃんを抱いて雑誌を読んでいる。赤ちゃんは、窮屈そうにもぞもぞとしきりに足を動かしている。日曜日の図書館は混んでいた。

いつのまにかウトウトした。夢の中、夕樹は見知らぬ街でひとり道に迷いあせっていた。

(大丈夫、だれかに尋ねるだけのことだ。あせるなあせるな)

と、自分自身に言い聞かせていた。はっと意識を取り戻して、まわりを見まわすと隣の赤ちゃんがぐずぐず泣いている。夕樹は立ちあがり書架の間を歩いた。小説や旅行記を手にとりパラパラ頁をめくった。そして、オーストラリアの旅行記とガイドブックを1冊ずつ選んで貸し出カウンターへ持っていった。今度はちゃんと読もう。

英会話の講師はオーストラリア人が多い。エメリーナはどちらかというところ繊細な感じの女性だが、カイリーは快活で身体も態度もでかく豪快な女性だ。

日本に来たばかりのエメリーナに訊いたことがある。

“Are you having a good time here? What do you usually do in your spare time?”

” Not very much. Usually I spend my days off cleaning, sending E-mails home and being just relax. I’m always very tired on weekends.”

「ここは楽しい？あいてるときは、いつもなにしてるの？」

「(休みだからといって) あまり、いろいろしないのよ。休みは、たいてい、そうじをしたり、メールを家に送ったり、のんびり過ごすの。週末になると、私とても疲れてるの」

身体の大いカイリーは大きな声で豪快に笑う。

“I like cooking but hate cleaning up. I tell my boyfriend ‘Oh, I cooked. You have to clean up.’”

「私は料理するのは好きだけど、かたづけは大嫌い。彼氏に言うの『料理は私がしたんだから、かたづけはあなたよ』って」

彼女に、こんな風にぴしっと言われてたら、「あ、ハイ」ってやるしかないよな、と夕樹は思った。退職年齢について話していたときも、カイリーはこれまたガツンと言った。

“The retirement age for women in some companies is a little lower, right? It doesn’t make sense because women have longer life expectancy than men.”

「女性の退職年齢って、会社によっては、(男性より) 少し早いんだって、そうなの？そんなのおかしいよね。だって、女の方が男より長生きなんだから」

去年の大晦日、夕樹は浩人と一緒ではなかった。仕事の関係で浩人は帰ってこなかった。大晦日を家で過ごしたと夕樹が言うと、カイリーは信じられないという表情をした。

“Did you spend New Year’s Eve at your home? With anyone? Just with your family? Did you count down? No?What time did you go to bed?”

“The same as usual, just before twelve.”

“That’s terrible!”

「大晦日を家で過ごしたって？だれかと一緒に？えーっ、家族だけで？カウントダウンはしたの？してない！何時に寝たのよ？」

「(寝たのは) いつもと同じよ。12時少し前よ」

「それは、ひどい！」

でも、カイリー、That’s terrible! はひどいよ、と夕樹は笑った。

図書館を出た夕樹は駅にむかって歩き始めた。図書館のある駅の西側は、最近どんどん開発されている。道路は車道も歩道も広くつくられ、新しいマンションがあちこちに建っている。

携帯の着信が鳴った。母からだ。

「あっ、夕樹ちゃん。夕飯、もう支度した？」

「まだだけど」

「いっしょに食べない？すき焼きの材料買い過ぎちゃったのよ」

「・・・・・・・・」

「お父さんがね、『夕樹はどうしているかな』だって。さびしいのよ」

「先週もいっしょだったじゃない」

「病氣してから、気が弱くなったみたい」

「そう・・・・・・・・わかった。行くわ」

夕樹の姉は嫁いで名古屋にある夫の実家に入ってしまった。だから、父も母も、夕樹には結婚してからも近くにいて欲しいと考えているようだ。夕樹も両親が好きだから、そうなるといいなという気持ちがある。日本の親子関係って、欧米人からするとべたべたし過ぎだろうか？

”Are you happy to live at home? Or, do you like living by yourself?

「あなたは（両親の）家に住むのがいいの？それとも、ひとり暮らしの方が好きなの？」

と、エメリーナに訊かれたことがある。そういえば、スコットランド出身のベンは、こんな風に言っていた。

“Most people leave home at the age of eighteen, nineteen and twenty. It’s very unusual in UK for children to live at home with their parents. Such people are seen negative because they are unable to look after themselves. It’s not cool.”

「ほとんどの人は18、19、20歳で家を出る。英国では、子どもが（成人になってからも）家で両親と一緒に暮らすなんて、めったにない。そんな人は、どちらかというといマイチに見られる。自分の世話が自分でできないと思われてしまうからだ。かっこ悪い」

ベンのお話を聞いたときは、（ふーん、そうなんだ）と思った程度だったが、エメリーナの話は衝撃的だった。

”Do Japanese people like having their children with them at home? My parents are looking forward to us moving out, because they want to do their own things. People sell their houses, get a big camping car and travel around Australia when they retire. It’s very common.”

「日本の人たちって、（子どもが成長しても）子どもと一緒に暮らしたいと思っているの？私の両親は、（子どもの）私たちが家を出て行くのを楽しみに待っているわ。だって、親は自分たちのことがしたいからよ。オーストラリアの人々は、退職すると家を売って、大きなキャンピングカーを買って全国を旅行するのよ」

（えーっ、家を売ってしまう！？）

と、夕樹はびっくりした。それじゃあ、子どもたちはもどれないな。そうか、欧米の家庭には、日本のように先祖を祀る仏壇みたいなものはないのだ。親子の関係というか親子の情って、日本と欧米では根本的に異なるのだ。

豊橋駅に着いた。駅舎をふくむステーションビルは地下1階から地上4階までが、ファッション、生活雑貨、書店、花屋、レストラン、カフェ、お弁当、食料品などのショッピングエリアと英会話や料理教室などのカルチャーセンターで、5階から13階までがホテルになっている。

夕樹はガラスの自動ドアをくぐりエスカレーターに乗った。4階で降りると、明るい照明が人工大理石の床を隅々まで照らしている。このフロアには、カジュアルやレディースのファッションの店がいくつも立ちならび書店もある。大きなガラスの壁で仕切られたコーナーには、女性専用のおしゃれな料理教室があって、多くの若い女性が楽しそうに料理やお菓子づくりにいそしんでいる。夕樹の通う英会話教室はこのフロアの奥にある。清潔で、明るく華やかなフロアを横切って英会話教室にむかうとき、夕樹の心は少しウキウキする。

レッスンの生徒は夕樹も含めて3人だった。

"Hi, Cala. You look a little different today."

"Really? Oh. my hair? It's only tied. That's all. I was riding on a bicycle to here. It's windy. My hair is tangled."

「こんにちわ、カーラ。きょうは、なんか感じが違うね」

「え、ホント？ああ、髪のことね、とめただけよ。自転車でここまで来てね。風が強かったでしょう。髪がもつれたのよ」

カーラは、髪をとめたゴムひもをとって首を左右に振った。

"Anyway, better?"

「じゃあ、これでよくなった？」

夕樹は先回のハナシの続きを訊きたかったけれど、きょうは生徒が3人なので我慢した。レッスンのテーマは仮定法過去だった。

"What would you do if you saw someone shoplifting?"

「もし、だれかが万引きをしているのを見かけたら、あなたはどうしますか？」

仮定法の練習なのだから適当に答えればいいのに、夕樹はつつい真面目に考えてしまう。(どうしよう？いままで、一度も見たことない)

"I would tell a clerk that."

「店員に知らせます」

と、ひとりの生徒が答えた。ホントかなあ、と夕樹は思った。

"I would do nothing. It's none of my business."

「なにもしないと思う。私にはかかわりあいのないことだから」

と、言ったものの、It's none of my business は余分だったかなあと少し気になった。

レッスン終了5分前にカーラはテキストを閉じた。

"Next week, we're quitting and going back to Canada. Living in Japan is nice and an instructor here is a nice job but it's not a career. I can't stay here very long,"

“Oh, we'll miss you. You'll go back with Nick?”

“Yes, we have to find an apartment. He has to apply for a working visa. He won't be able to work legally for a couple of months. We'll have a hard time finding a job. That's my news.”

「来週、私たちはここをやめてカナダへ帰るの。日本に住むのは素敵なことで、ここでのインストラクターの仕事も素敵だけれど、一生の仕事というわけにはいかないのよ。ここで、あまり長く暮らすわけにはいかないの」

「さびしくなるね。ニックも一緒に帰るの？」

「そうよ。私たちはアパートを探さないといけない。ニックは就労ビザを申請する必要があるの。法律上、彼は2、3ヶ月間働くことができない。ふたりとも仕事を探すのに苦労するわ。これが、私のニュースよ」

意外な展開に夕樹は驚いた。カーラは、アイルランド人のニックを連れて自分の生まれ育ったケベック市へ帰るのだ。ニックは、父や母の住むアイルランドへは帰らずに、カナダ人カーラの故郷ケベック市でカーラと一緒に暮らすのだ。ふたりは、きっと何度も話しあったに違いない。そして、結論に達したのだ。カナダで一緒に暮らそうと。

(えーっ、そうなんだ)

と、カーラの顔を見つめていた夕樹は、気を取りなおし、あわてて挨拶の言葉をかけた。
“I'll miss you, Cala. I have really enjoyed our talks in lessons. Thank you, Cala. . . . And Good luck in Canada.”

“I'll miss you too, Yuki. Thank you very much. I hope to see you again.”

「さびしくなるわ、カーラ。いままで レッスンでの会話はホントに楽しかった。ありがとう、カーラ。そして、カナダでがんばってね」

「私もさびしくなるわ、ユキ。どうも、ありがとう。また会えるといいね」

夕樹が握手を求めて手を差し出すと、カーラはテーブルをまわってきて夕樹をハグした。夕樹は思わず涙ぐんでしまった。

駅ビルの外に出ると石段を駆けおりて路面電車に乗った。実家は電車の終点にある。きょうの夕飯は実家で両親と一緒にとることになっている。父のうれしそうな顔が目につく。

座席に腰をおろした夕樹は、ぼんやりと窓の外を眺めカーラとニックのことを考えた。ふたりはカナダでうまくいくのだろうか？

“Nick speaks French so maybe he'll be able to get a job quite easily.”

「ニックはフランス語が話せるから、かんたんに仕事が見つかるかもしれない」

とも、カーラは言っていた。ケベック州の公用語は英語でなくフランス語だそう。夕樹はエールをおくった。

(早く仕事が見つかるといいね。ニック、カーラ、がんばって！)

それから、夕樹は東京の浩人のことを想った。電車はクルマや人の行き交う駅前大通を走行し信号の交差点を左折する。さらに走り、今度は交差点を右に曲がって進み「市役所前」の電停でとまる。窓の外に目をやり、浩人との口論を思い出していた夕樹は、「市役所前」というアナウンスを聞くと、あわてて立ち上がり前の人につづいて降りてしまった。「ユキ、降りるよ」というヒロトの声が聞こえたような気がしたのだ。

日は西に傾いていたが、頭上の空にはまだ白い雲が流れている。夕樹はカーディガンをはおると歩道を少し歩いて豊橋公園に入った。公園の中は、ソメイヨシノ、榿、黒松、赤松、ケヤキ、イチヨウ、クスノキ、ムクノキ、モミジなど多くの樹木が夏の緑葉を繁らせ涼しげな日陰をつくっていた。つくつく法師がしきりにないている。樹木と樹木のあいだには、いくつかの小径があって、散策する人々や公園内にある美術館や運動施設にむかう人々がまばらに歩いている。

夕樹は正面の小径をまっすぐ北にむかって歩いた。ここは浩人とのデートコースだ。これまでに、この公園で、ふたりはどれだけの時間を過ごしたのだろうか。ふたり肩をならべ歩き、高校時代の思い出やそれぞれの仕事のこと、友人や家族のこと、本や映画、さまざまなことを伝え語りあい、一緒に笑い、ともに憤慨し、ときには言い争いもした。春には花見をして秋には美術館をのぞいた。

公園の西の奥には城跡がある。秀吉時代に池田輝政が城主となって整備した城の跡である。水のない内堀にかかる小さな橋に、モミジや松などの葉がおおいかぶさり、橋の先の両側に石垣が見える。本丸の4隅に配置されたやぐらの石垣が残っているのだ。4つのうち北西のやぐらだけが復元されている。

夕樹は、いつものように復元されたやぐらを見あげてから、右側の大きな松の植え込みをまわって急勾配の石段を降りた。そこは豊川の岸辺で遊歩道になっている。ときおり散策する人々やジョギングする人々と行き交う。遊歩道につくられた石の椅子に腰をおろして川を見渡した。対岸には、釣り人たちが糸を垂れている。川面を渡ってくる風が心地よい。夕樹は1カ月前のお盆休みのことを思い出していた。

夕樹と浩人は、この遊歩道を歩き、この石の椅子に腰かけ夕焼けを見つめていた。結婚や東京での生活について語りあい、なんとか結論を出そうとしていた。しかし、日が沈んでも、残照でバラ色に染まった雲が灰色に変わっても、ふたりの考えは一致しなかった。

いま、夕樹の隣に浩人はいない。夕樹はひとりで考えをまとめなければならなかった。西の空に夕焼けがひろがりはじめた。夕樹はあせりを感じた。

(いそがないと・・・わたしは、どうしたいのか?・・・いま、ここで決めなければ)

空と川が夕映えに染まった。夕樹は決心した。

(東京に出よう。浩人と一緒にいたい)

浩人と過ごしてきた時間を失いたくない。これからも、浩人と一緒に歩いていきたい。ともに笑い、悲しみ、憤慨し、そして感動したい。

(大丈夫だよ)

夕樹は自分自身を励ました。あれこれ考えすぎて一歩が踏み出せなかった。どんどん臆病になっていたのだ。失敗したって、またやり直せばいいじゃない。父も母もきっと賛成してくれるだろう。そして、カーラは言うだろう。

“Yuki! You only live once.”

「ユキ！人生は一度きりだよ」

今や英語が世界共通語になっています。外国であれ日本国内であれ、また仕事であれ私的なつきあいであれ、日本人が外国人と英語で会話する場面は増えているはずです。

しかし、実際に会話されているその英文が、日本語の本文の中に自然に挿入されている和書がありません。

海外旅行記や海外滞在記には、現地の人々や、そこで出会った外国人との会話が出てきます。それはふつう日本語訳で書かれています。こんな箇所を読むとき、私は、この会話は実際にはどのように表現されたのだろうかと考えることがあります。

外国人と話をしている、社会や文化の違いとか考え方や価値観の違いに気づかされ驚くことがあります。とくに、国家とか戦争とか、あるいは安全保障や歴史認識などの問題になると、日本人同士の議論では気づかなかった視点が見えてくることもあります。

そういう観点からすると、日本人と外国人との会話を手がかりにして、さまざまな問題を考えてみることは、私たち自身の考え方や価値観を他者の視点から検証することにもなり有意義なことだと考えます。

この場合、会話文をすべて日本語訳で記すと、リアリティーというか信憑性の点で問題が出てくるような気がします。最悪の場合、「相手は本当にそんなこと言ったの？」とか「筆者の思いこみではないの？」ということにもなりかねないと思うからです。

そんな危惧を排除するために、日本語訳の前に、英語での会話文をそのまま英文で載せたらどうでしょうか。そんな旅行記や評論あるいは随筆があってもいいのではないかと考えるのです。

さらに、それならば、外国人との会話を軸にストーリーを展開するフィクションはどうだろうか？とも考え、このショートストーリーを綴ってみました。ただし、英会話は、私自身が英会話教室で講師たちと交わした実際の会話です。

2012年10月

You only live once

<http://p.booklog.jp/book/58145>

著者:内田芳邦

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bon1582/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58145>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58145>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブックログ